

## 雪の思い出

校長 武井 正明

昨日昼休み、赤倉のスキー県大会に出場した2年生男子が、結果報告に来室してくれた。回転競技で、全国進出は逃したものの県8位！過酷な競技の世界に身を置いて頑張っている様子も聞いた。これからも、陰ながら応援させていただきます。頑張れーっ!!

雪で思い出した。もう17年前になる。湯沢に3年間単身赴任した。

川端康成の小説「雪国」の地で、私は多くのことに気づかされた。家族や友人、同僚先輩のありがたみ、自分の視野の狭さ、指導力不足、四季の美と自然の厳しさ…。

年間パスポートを買って、温泉には一生分入った。つるつる滑る、白色で熱めの温泉「山の湯」は格別だ。また、雪の厳しさは、私の想像をはるかに超える厳しいものだった。

一旦降り出すと、これでもかと降る。やまない。湯沢の除雪はもはや芸術だ。車道はきれいに整備され、歩道も確保される。

ただ、あまりに降り頻る朝など、教員住宅から徒歩で行けるのに、学校に向かう足が重くなる朝もあった。寒い夜も孤独だった。単身赴任が天国だと言う人もいるが、私には天国でも何でもなかった。早く帰りたくて、最後の一年はカレンダーに、一日終わると×印をつけて（これがなかなか減らない）自分を励ました。吉中保護者にも、そういう方がいらっしゃるかもしれない。あなたの親御さんも、きっと歯を食いしばって頑張っているはず。だから帰宅した時は「おかえり！」と、笑顔で温かく迎えてあげてほしいな…。

私はスキーが苦手。湯沢中生たちは、滑れるのが当たり前。しかも曲芸みたいな滑りやジャンプを軽くやってのける。その運動神経に、圧倒されるばかりだった。

ちょうど当時人気絶頂だった、プロゴルファーの石川遼が、学校近くのゴルフコースで冬季トレーニングに来ていた。クロスカントリーがゴルフにも良いという。それで私もクロカンに、少し前向きになった。

グラウンドのコースづくりに圧雪車の運転もした。地元の先生方は難なくこなすが、不慣れな私は、この運転がとても怖かった。しかし、きれいに圧雪された、快晴の太陽眩しいコースを、ゆっくり滑っていくのは、とても心地よかった。

今でも思い出す景色がある。

黒い空、ライトが雪を照らす、岩原スキー場（リフト乗り場付近には、窯で焼く、ピザの美味しい店があった）のリフトを降りて振り返る。冷たい空気がピンと頬を刺す。

眼下には関越道のオレンジのラインが、美しく曲線を描いて谷合を抜けていく。

ああ、この先は関東か。オレも随分遠いところに来てるんだな…と感傷に浸った。

苦しかった時ほど懐かしいものだ。今や湯沢学園。隔世の感がある。